

2009 年度 高等部卒業式

告 辞

部長 大村 修文

今ここに、青山学院高等部を巣立とうとされている3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。お足元の悪い中をお集まり下さった保護者ご家族の皆様方にも、お子様のご卒業を心よりお喜び申し上げます。かつては幼子だったお子様が、子どもから大人への脱皮の苦しみを経験しながら、いつの間にかここまで立派に成長されたことに、感無量のことと拝察いたします。皆様方は今後、保護者と呼ばれる立場ではなくなり、大人扱いされていく若者との新しい親子関係に入られます。

卒業生の皆さんは、青春のときを過ごした青山学院高等部でのご自分の生活を思い起こしておられると思います。皆さんは2年生から始まった校舎の取り壊しや建築の騒音に悩まされ、体育館を初めとしてカフェテリア、談話室などがなくなったことによる、学校生活の不便さを強いられてきました。それでいて皆さんは、新校舎の恩恵を受けることは全くできずに、高等部を去らねばなりません。

さらには、インフルエンザの影響で文化祭も縮小せざるを得なくなったりもしました。それらの中には、ある意味でやむをえないことと我慢していただかなければならなかった面もある一方、学校として十分な対応をしてさしあげられなかった面も確かにあります。それにつきましては、3年生の皆さんはもとより、保護者の皆様方にもこの場でお詫びをいたしますとともに、様々な点で忍耐して下さったことに深く感謝申し上げます。

また、3年生の皆さんは例外的に2年間を東A校舎で過ごした学年でもあります。東A校舎は北校舎・生徒会館とともにまもなく解体される運命にあります。北校舎が青山学院最古の風格ある建造物として惜しまれているのと異なり、東A校舎はまだ築三十数年で、同窓生にも語られることの少ない建物ですが、皆さんにとっては青春時代のかげがえのない2年間を過ごした思い出の建物であることでしょう。それぞれのホームルーム教室や図書館はもとより、ベランダで友と語り合ったことや広い廊下で後夜祭やダンス大会の練習をしたこと、さらにはボール遊びをして叱られた思い出なども甦ってくるかもしれません。

そして、今私たちが集っているこの PS 講堂は、今日を最後に講堂としての使命を終え、2 期工事中の仮の図書館にするための準備に入ります。今まで卒業式の度に「ここで皆揃うのは君たちにとって今日が最後」と私は卒業生に言ってきましたが、本日こそ、私たち教職員を含めて PS 講堂を愛する者が、講堂としてここに集う本当に最後の日となります。

PS 講堂の由来について卒業生はご存知と思いますが、戦前、青山学院高等女学部において、長いこと講堂がなく不便していたところ、スプロールズ高等女学部長が講堂新築の使命感を抱いてアメリカに一時帰国し、募金を訴えて回ったのです。隠退生活をされていたプラット夫人がそれに共感して、ご自分の全財産をいずれ寄付すると申し出られました。その後完成した講堂は「プラット記念講堂」と名づけられましたが、第二次大戦末期、1945 年 5 月の大空襲により大破してしまいました。アメリカ人の熱意と善意によってたてられた PS 講堂がアメリカ軍の爆撃により破壊されたことは、歴史の皮肉としか言えませんが、今日 3 月 10 日は別の東京大空襲がなされた日でもあることを覚え、戦争の愚かさと平和の大切さを改めて共に考えたいと思います。

講堂はやがて修復され、スプロールズ部長の名も加えてプラット・スプロールズ講堂、略して PS 講堂と呼ばれるようになりました。その後、入学式や卒業式を初め、高等部の教育の精神的中心として、毎日の礼拝において生徒の心を育み、文化祭や生徒集会その他の行事で生徒達が青春を謳歌する場でもありました。2012 年 7 月に別の場所、今の生徒会館辺りに完成する新講堂も、同じく PS 講堂と名づけられることになっています。

さて、皆さんがこれからの自分の生活に期待していることの一つは、自由ということではないでしょうか。青山学院高等部は自由な学校と言われますが、生徒の立場で見ると、そう思えなかった人も多いでしょう。「生活の心得」と呼ぶ高等部の規則も、ルールを守らされる立場からすれば、拘束に違いありません。しかし今後は自由の幅が広がります。

私事で恐縮ですが、この 4 月から、私も自由な身になります。様々なしがらみから解放される日を心待ちにしていると同時に、自由とは何かをつくづく考えさせられてもいます。自由とは、全ての人が自分に関して最も大切にしたいものの一つです。

自由をドイツ語で Freiheit といいます。この言葉の語源は「誰かの愛の下にある、誰かに保護されている」という意味から出たと言われます。これは意外ではないでしょうか。自由とは、誰かに保護されているようなことと正反対に思われるからです。しかし、極めて不安定な社会状態にあったヨーロッパ中世においては、自由とはより強力な人の保護を受けて初めて確保できるものだったので、このような考えが出てきたのです。勿論、封建社会の自由観を、現代人の我々がそのまま受け取ることはできませんが、これを個人に当てはめてみれば理解しやすくなります。幼い子どもは、親の保護によって初めて安全と自由を確保できるのです。そして実は、親はいつまでも子どもを陰で保護し続けてもいます。

世界の歴史は、自由を求める運動で形成されてきたとも考えられますが、様々な拘束から解放されて自由を手にした人間によって、もしその自由が正しく用いられない場合、どのような結果を招く危険があるかは、現代社会においてもまのあたりにするところです。

先ほど読んでいただいた新約聖書は、自由について述べています。「兄弟たち、あなた方は自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪をおかさせる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。／だが互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい」。この後半部分はホッブズが『リヴァイアサン』で「人は人に対して狼である」といったことを思い出させます。彼は「全ての人々が完全に自由であったら、誰一人自由でなくなるであろう」と言いました。実に興味深い言葉で、その意味するところは皆さん想像できるでしょう。人間の自然状態は戦いの中にあると考えたホッブズは、それを防ぐために社会契約を導き出して国家権力を擁護したのです。

ホッブズより遥か前に、自由の持つ価値と共にその危険性に気づいていたパウロは、野放図な自由をコントロールするものを別な所に求めました。彼は「律法全体は『隣人を自分のように愛しなさい』と言う一句によって全うされる」と語るのです。これこそイエス・キリストが身をもって示されたことでした。世の中の多くの法や規則は大切だとしても、最終的には隣人愛という律法に集約されるというのです。それは、私たちの本来の自由が、神から与えられ、皆が神に愛され神の保護の下にあると考えるときに初めて理解されます。

そのときに一人の自由な人の生き方が、他の人の自由を脅かすことがなくなるで

しょう。

私自身こうした生き方を到底なしえていませんが、これこそ人生の目標だと考えています。

皆さんはこれからのより自由な生活の中で大いに自己実現を目指すと同時に、21世紀の新しい世界を担う皆さんには、それだけ大きな責任が伴うことも忘れずにいていただきたいと思います。「愛によって互いに仕えあう自由」とは、青山学院高等部のこの PS 講堂で今まで学んだ聖書の言葉の集約でもあります。自由な校風といわれる青山学院が真に誇ることができるのは、聖書にあるような自由が卒業生たちによって生かされていくときです。

高等部での様々な学びが皆さんを強め、明るい未来社会を作る力となるものであることを切に願って、私の告辞といたします。本日はご卒業、誠におめでとうございます。

(2010.3.10 於：PS 講堂)